Title	自発的結合と制度的結合
Sub Title	Sponteneous connection and institutional connection
Author	横山, 寧夫(Yokoyama, Yasuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.557- 569
JaLC DOI	
Abstract	All human relations (A-B) are based on a common field (C) whose mucleus is constructed from institutional complexes, and these relations are able to have reality only by sharing such a common field. At the same time, C is actualised its meaning being supported by this A-B relation. And the way of support is illustrated by the way how social system as a whole keeps its equilibrium. When we talk about human relations, we assume generally that there exists the physical and psychological likeness or common interest among human beings, and try to place the relation upon a foundation which probably derived from the homogeneous responses of individividual social expectations. But when we look the human beings from a standpoint that they are essentially heterogeneous in a sense that the meaning they hold is different in their constellation, and in what way they maintain the equilibrium of this heterogenity, we must classify human connections. Sponteneous (regulation by inner will) and institutional (regulation by outer power) connections. Sponteneous connection to some purpose, whereas the institutional connection can be divided into 1) self-effacing connection by some value-feeling, and 2) co-operated connection, and 2) compulsory connection by some institutional enfocement. Sponteneous and institutional connections are dependent upon one another and mutually share a common basis. Through this classification, we can see all the human relations in a way how they are saturated by outer or inner power, and it will serve the purpose of studying the state of equilibrium of historical social system.
Notes	Ⅳ 社会,慶応義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035- 0562

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

	五五七					·	•	自発的結合と制度的結合	的結合と	自発
非心理的に取扱う形式社会学(特にウイーゼ)は社会関係の意味を問はぬことによって心理	を問はぬこ	い意味を	4社会関係	し ウイーゼ) け	ナ(特に	心式社会学	収扱う形	非心理的に		社会を非歴史的、
•							•	見える。	る様に	当な見方である様に見える。
一礎は類似にあると考えるのも一応妥	いあると考ら	受は類似に	合的基礎	此の意味では社会関係の結合的基	心味では		するから	似性が存在す	心の類の	的に対する関心の類似性が存在するから、
亦分業的差異に於いても共同目	未的差異にな		れて居り	補足するにしても、其の根柢には人格的性的欲求の類似の関心が置かれて居り、	小の類似	1性的欲步	は人格的	其の根柢に は	ても、サ	補足するにし
差異の如くに、それが相互の機能を	ヽに、それ が	三異の如く	「質上の美	係を創り出すべき基礎であるとも考えられる。然し例えば男女間の性質上の	心例を	れる。伏	も考えら	硬であると	べき基礎	係を創り出す
反って相互に他を求め補足し合う関	一に他を求め	いって相互	「異こそ反	れが類似である限り必ず其処には何程かの差異が存在し、而も此の差異こそ	に存在し	この差異が	い何程か	必ず其処には	る限り	れが類似であ
一礎である。尤も如何なる類似性もそ	尤も如何な	死である。	こめる基礎	相互の接近や結合を可能ならしめる基	や結合	「互の接近		同類感を喚起し、		解を可能ならしめ、
の肉体的精神的類似は人間相互の理	行神的類似は)肉体的精	即ち人間の		しあると	な見解で	い支配的	を求めるの	の根拠な	る蓋然性にその根拠を求めるのが支配的な見解であるといえよう。
同一の環境からの刺戟に対して彼等が略々同質的な反応的行為に出	、同質的な同	公等が略々	対して彼	いらの刺戟に	の環境		仕を措定	心理的類似的	生理的	て共通にもつ生理的心理的類似性を措定し、
一方彼等が生物的人間とし	方彼等が生	乍らる、一	、を認めて	各個人的行為の中に差異を認め	人的行		るに当っ	人間の社会的結合関係を論ずるに当って、	的結合問	人間の社会
夫	寧	Щ	横							•
				制度的結合	度的	と制	結合と	発的結	自発	•

(1)

哲学 麦瓜儿 表到 立百年記念論文集 五五八
学から社会学を区別した。此の場合人間は凡べて原子的な個人として同質的に考えられている。然し人間関係的
事象が自然現象と異なること、従って其の質的相違こそ重視されねばならぬとする見解が此の形式的立場に等し
く加えられる批判であり、此の様な意味での人間の同質性を措定する事は現在では殆ど支持を失っている。
社会を精神内容と観る立場のうち、テンニイスのゲマインシャフトとゲゼルシャフトは、彼がこれを本質意志
と選択意志に由来せしめるとき、明らかに此の意志主義には凡ゆる人間がこれ等の意志を共有するものとして人
間の同質性が前提されている。ただ人間の類似的関心の内容的不安定性の故にテンニイスの二範疇には結合と分
離が常に共在して居り、彼はこれを「凡ゆる分離にも拘らず結合している」状態と、「凡ゆる結合にも拘らず分
離している」状態に区別したのであった。而も此の「意志」は何物にも妨げられない限りでの意志であって、自
由に行動しようとし乍ら意志通りには行かぬ場合に就いては彼の理論の中に闡明されていない。
形式社会学的手法を以てし乍ら社会を精神内容として観る立場には更にフィアカント、マックス・ウエバー、
髙田保馬等の理論が挙げられる。特にウェバーは社会的行為の概念を提出して、社会関係を一定の仕方で社会的
行為が営まれる可能性(チャンス)に於いて考え、社会を相互作用から状態に移した。此の場合行為者間の連帯
性の有無は大した問題ではない。各人は社会関係に同一の意味を与えているわけではないから、その関係は客観
的には一方的である。然し行為者が相手から相互に一定の地位を前提し、その行為の期待に方向付ける限り社会
関係は成立するのであって、其の時は双方的であるとも云えようが、全き意味対応的関係は現実では極限概念に
過ぎないから双方的と云っても絶対のものではない。(M. Weber, Wirtschaft und Gesellschaft. 1925. S. 14)
彼が関係の調和(Entsprechen)を不必要の如く考えたのは恐らく他人の完全な理解は困難であると見たからで

(2)

	五五九	自発的結合と制度的結合
る。 (教	故新舘教授もこれを支持して居られる。	の持続を同一目標として協力する成員の共通の関心であると考え、
らは集団	定であるが、これに持続性を与えるものは集団	に留まる間は関心内容やその強度の相異の故に彼等の団結は不安定であるが、
の関心	ory Analysis p. 32)、人々がただ類()	あるとし (MacIver, Community p. 103; Society, An Introductory Analysis p. 32)、人々がただ類似の関心
もので	共通の関心は人々が協力的に関与する	を区別し、類似の関心は個別的な自分自身の為にもつものであり、共通の関心は人々が協力的に関与するもので
nterest)	ike interest)と共通の関心 (common i	マッキーバーも大体冒頭の見解に従っている。彼は類似の関心(like interest)と共通の関心(common interest)
	は同一の傾向にあると考えられる。	本潤一郎 集団社会学原理 三〇五頁)此の点に関する限り結局は同一の傾向にあると考えられる。
) に (松	元方ではないであろう」と論じているのは	過程に統一的環節現象の諸形態を実現する事は実際に鑑み不当な見方ではな
て社会	をあらわし、此の一致性あることによっ	とはないが、然し此の場合社会的行為が大多数的に何等かの一致性をあらわし、此の一致性あることによって社会
にするこ	記さ、一方的行為が皆悉く一致性を満足するこ	い。亦松本教授が此の調和の意義をより重視しなければならぬと説き、
ていな	二一六頁)と説くときやはり人間の形式的同型性の考えを脱していな	が人間を親和せしめる」(同 社会学概論 二一六頁)と説くときぬ
これ	即ち社会の成員には異質の範囲に属しない共同の性質をもち、これ	結束についてそれは或程度の同質性を伴う。即ち社会の成員には思
異質の	十二頁)、然し異質的結合の問題に関して、例えば連続的異質の	置換えている。(高田保馬 社会学の根本問題 十二頁)、然し異質
言葉に	という言葉を高田教授は「相互作用への相互用意」という言葉に	ウェバーの「社会的行為がなされる可能性」という言葉を高田教
		入って論述していないのである。
深く立	異質的存在間の結合的諸契機等の問題には余り深く立	思われる意味が如何にして可能であるかについての前提、異質的友
観的に	悟造(マンハイム等の意味で)、 或は主観的に	の相互理解の可能性の方向に展開させているので、 個人的な視座構造(マン
間一般	は確かであるが、ウェバーは問題を人間一般	あろう。とも角此の辺には現実的人間の異質性が考えられている事は確かで

(8)

哲学 慶應義整創 立百年記念論文集 五六〇
養講座社会学 有斐閣 初版七八頁以下)此の考え方は結局結合は集団形成乃至持続への関心によって成立する
となす。人々の内容的に異なり矛盾さえも含んでいる類似的関心が結合せざるを得ないのは、それが彼等の生活
の場となるに他ならないからである。換言すれば人間は生きんが為に結合に追いやられるということになる。こ
れは後述する様に、私の言葉で云えば(広義の)制度が結合を強いるのである。尤もここでは結合の基礎に最早
人間の同型性というよりも、人間に類似的或は共通に抱かれた意味が問題となっている。然し以上のものだけが
人間結合の凡べてであろうか、そして類似を基礎に置くその根拠は何であろうか。
社会を人間関係一般として普遍的に考察する立場では必然的に人間の或種の同質性を根柢とせざるを得ないで
あろう。然し特殊的個体としての社会を歴史的に考察する立場では人間の異質性(即ち各々の視座構造の中に置
かれている個人と云う意味での)から出発しなければならない。即ち社会関係を関係者の対他的志向の均衡とい
う観点から見るならば、何が結合自体の基礎であるかという問い、従って其の基礎にある人間の何等かの同質性
は最早大した問題ではなく、むしろ人間関係を均衡に迄齎らす結合的動機を問う事が重要なのである。このこと
は人間の同質性や類似性を否定することではない。ただ問題の関心として人間の同質的基礎付けより以上に人間
の置かれている異質的状況、即ち各人間の特殊性が興味の対象となるというにすぎないのである。従って人間の
同質性を基礎とするか、異質性を基礎とするかは、嘗ての自然法にみられる様に人間性の本性を善とみるか悪と
みるかという様な恣意的な前提によるものではなく、社会を考察するに当ってこれを関係一般(或は形式主義的、
心理主義的社会学より出発してこれに歴史的内容を併置せしめる立場をも含めて)とみるか、或は社会を歴史的
社会体制としてみるかに従って区別される考え方の相異である。

(4)

五六一	自発的結合と制度的結合
。然し人間が環境の動物であると共に環境に対し	境が結合を強要したとき同類の方が都合が良いというに止まる。
類をよばない可能性もある。。類をよぶのは本能ではなく、一定の環	すぎない。類は類をよぶ可能性は多くても、類をよばない可能
様に、単なる類似もそれは結合の可能性を示すに	なる差異はそれがたとえ相互に補足的であっても結合に到らぬ様に、
。結合には結合せしめる力がなければならぬ。単	各々の枠内に於いて外部の強制に対して消極的に従うのである。結合には結合せしめる力がなければならぬ。単
解釈して自己を満足せしめつつ(或は不満のまま)	りえないであろう。此の際人間はその媒介目的を自分なりに再解釈して自己
そこに何等かの人間的意志が働かぬ限り結合はあ	を積極的に自発的に合せて行こうとする。然し後者の場合でもそこに何等か
この二つの場合のうち、前者の場合人々は一定目的に自ら	れている状況が同質性を強制するかによってである。この二つ
同質性への各自の調整的な努力によるものか、或は彼等の置か	されるから結合するのである。それは各人間の、同質性への各
い。人間の異質性が何等かの契機によって同質化	る。この場合人間結合は人間の同質なる故に結合するのではない。
城に於いて研究さるべき方針を含んでいるのであ	の異質性の概念には各文化的差異を担った人間が夫々の特殊領域に於いて研究さるべき方針を含んでいるのであ
史的人間の異質性に立脚する立場からすれば、此	パースナリテイの特殊性が強調されるのであって、最初から歴史的人間の異質性に立脚する立場からすれば、此
る。その限りに於いて殊更に文化的差異に於ける	社会学的方針を以てこれを拡充しようとする意図に基づいている。その限り
考え方は形式社会学的社会概念を根柢とし、文化	考えられはしないかという疑問も生じ得るであろう。然し此の考え方は形式社会学的社会概念を根柢とし、文化
類型を比較する場合其処には異質性の亦異質性が	に住む住民も原理的に異質的とするならば、都市と農村の人間類型を比較する場合其処には異質性の亦異質性が
る批判として其い意義をもつからであり、亦都市	ば最近の文化人類学的アプローチは従来の人間的同質性に対する批判として
ものになってしまう様にも考えられる。何故なら	る文化類型の相異の問題などは程度の差か或は極めて影の薄いものになって
例えば文化人類学的研究に於いて追及している各文化領域に於け	各個人を原理的に異質的存在と認めた場合、 例えば文化人類

(5)

哲学 慶應義塾創立百年記念論文集	五大二
て主体でありうるということ(人間的行為に対する此の前提を本文は一応認めて置かねばならない)は吾々が環	一応認めて置かねばならない)は吾々が環
境的に結合を強制されるに止まらず、その強制を括弧に包んでも自発	その強制を括弧に包んでも自発的に結合しうる可能性を持つことを示して
いる。此の自発性乃至自由性という言葉は何等か神秘的な響きをもつ如くに考えられるが、吾々はこれを人間的	叫くに考えられるが、吾々はこれを人間的
発達段階に於ける合理的思考能力に基礎付けて差支えないであろう。	それは一定の概念内容は各個人の地位から
多様に解され得ること、而して個人は其の多様性を合理的に自由に選択しうることを意味する。その行為は単に	バしうることを意味する。その行為は単に
外面的な利益性に合致する行為のみならず、所謂M・ウエバーの目的	・ウエバーの目的合理的行為と共に価値合理的行為をも包含
する。人間の異質性とは形式的に考えられた同質性の対概念ではなく、	従って結合への通路を全く遮断された形
式概念ではなく、主体の調整的意志によって其の異質の儘に結合を保証されるものである。此の意味では環境的	赴されるものである。此の意味では環境的
に結合を強制される制度的結合も何等か其処には自発的動機によって支えられて居り、自発的結合も其の自由な	文えられて居り、自発的結合も其の自由な
選択の基底には必ず制度的前提によって底礎されている事に注意されねばならない。更に自発的結合と雖もそれ	ねばならない。更に自発的結合と雖もそれ
が次第に客観化される過程に於いて本来の生の意義を失い制度的結合に転化する可能性があり、同様に制度的結	に転化する可能性があり、同様に制度的結
合と雖もその結合の内部に新らしい自発的結合の発生の契機が存在する事を見逃すことは出来ない。後者の場合	る事を見逃すことは出来ない。後者の場合
に就いては、本稿の意図とは別の視角からではあるが、米国の産業社	米国の産業社会学を中心とする実証的研究が明らかにし
たフオーマルな人間関係とインフオーマルな人間関係の区別が想起されて良いであろう。即ちインフオーマルな	れて良いであろう。即ちインフオーマルな
人間関係とは例えば官僚制の如きフオーマルな構造内に於いて自然的な相互作用の結果出来上るものであって、	な相互作用の結果出来上るものであって、
公式には認められなくともやはり何等かの私的な規則を有し、フォー	マルな形式の中に新しい秩序を築くもので
ある。従って吾々が人間結合を自発的結合と制度的結合の二つの範疇に分類するにしても、自発的結合の内部に	に分類するにしても、自発的結合の内部に

(6)

	私見によれば結合とは関係する各個人が承認する限りに於いて成立する相互的行為の意味的均衡であり、対	状態に於いて結合せしめられているかと云う様な点が特に関心事となるのである。人間結合を自発的結合と	的結合の観点から分類した理由も此処にあるのであって、これは次に述べる如く更に分析されねばならぬに、		高志を貫徹しようとする事である。従来 意志を貫徹しようとする事である。従来 意志を貫徹しようとする事である。従来 意志を貫徹しようとする以上、結合の意 的動機に従った分類であって、結合の意 のである。人間結合を自発的結合と制度 しているか、それが現在如成なる であると考える。 のしてを自発的結合と制度 たるとの、のしてそれが現在のたる。 のたると のたる。 のたると のたる。 のたる のたる のたる のたる のたる のたる のたる のたる のたる のたる
		間前で均能てになった。	認 に 個 前 で 均 能 て に た た た 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	こは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の	
		間前で均能てては、「「「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」で、「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「」の「	記 個 前 で 均 能 て 於 体 述 結 衡 集 相 い で し 合 の 団 互		
a fran	4	間前で均能	ため 個前で均能 がな がの 年の の 団	と以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在	吾国でも此の線に沿って集団を基礎に
を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎を一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志や日とは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。必私見によれば結合とは関係する各個人が承認する限りに於いて成立する相互的行為の意味的まです。	を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎は一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志や日とは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。父	的個前 本 街 の	記 個 前 で 均 が 体 述 結 衡	と機能集団に区分するのが代表的な見解である。これは云わば成員の心	的動機に従った分類であって、結合(
と機能集団に区分するのが代表的な見解である。これは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎に一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やことは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。24 私見によれば結合とは関係する各個人が承認する限りに於いて成立する框互的行為の意味的ま復てまり、	と機能集団に区分するのが代表的な見解である。これは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎は一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やことは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。	PT 1 1		休的均衡の側面はそれ程重視されていない。然し私は各個人の本質的異	(質性より出発する以上、結合が如何・
昧的均衡の側面はそれ程重視されていない。然し私は各個人の本質的異質性より出発する以上、結合が如何・と機能集団に区分するのが代表的な見解である。これは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー投に用いられてにる社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー殺に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー殺に用いられてはる社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー殺に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー教に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー殺に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー	味的均衡の側面はそれ程重視されていない。然し私は各個人の本質的異質性より出発する以上、結合が如何、と機能集団に区分するのが代表的な見解である。これは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やことは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。	1111		4方で結合せしめられているかと云う側面に重点を置く。それは結合の	動機よりも結合の現在的状態が中心
仕方で結合せしめられているかと云う側面に重点を置く。それは結合の動機よりも結合の現在的状態が中心、味的均衡の側面はそれ程重視されていない。然し私は各個人の本質的異質性より出発する以上、結合が如何をして相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎として分類に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー教に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志やロー	仕方で結合せしめられているかと云う側面に重点を置く。それは結合の動機よりも結合の現在的状態が中心、味的均衡の側面はそれ程重視されていない。然し私は各個人の本質的異質性より出発する以上、結合が如何を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎や一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志や日とは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。	結的個体であるからには、それが如何なる均衡を以て一つの歴史的個性を形成しているか、それが現在如成	状態に於いて結合せしめられているかと云う様な点が特に関心事となるのである。人間結合を自発的結合と結約個体であるからには、それが如何なる均衡を以て一つの歴史的個性を形成しているか、それが現在如成		、社会体制が均衡的にまとまりのある
前で均能てに一見述結衡集相用方に	る。前述した様に社会を歴史的社会体制として考察する立場からすれば、社会体制が均衡的にまとまりのある完た方で結合せしめられているかと云う側面に重点を置く。それは結合の動機よりも結合の現在的状態が中心となた的均衡の側面はそれ程重視されていない。然し私は各個人の本質的異質性より出発する以上、結合が如何なる、と機能集団に区分するのが代表的な見解である。これは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合の意を以て相互に結合しているかを基準として分類されたものが多く、現在吾国でも此の線に沿って集団を基礎集団一般に用いられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志や目的とは一方的関係が相互に承認されることなく不均衡のまま相互に自己の意志を貫徹しようとする事である。従来		状態に於いて結合せしめられているかと云う様な点が特に関心事となるのである。人間結合を自発的結合と	精的個体であるからには、それが如何なる均衡を以て一つの歴史的個性	1を形成しているか、それが現在如成
品 感 n 合 に 個 前 で 均 能 て に 一 見 の 於 体 述 結 衡 集 相 用 方 に 観 い で し 合 の 団 互 い 的 よ	るに個前で均能てに一の於体述結衡集相用方	的結合の観点から分類した理由も此処にあるのであって、これは次に述べる如く更に分析されねばならぬに			るのであると考える。
基合に個前で均能てに一見 本の於体述結衡集相用方に 的観いでし合の団互い的よ	基合に個前で均能てに一本の於体述結衡集相用方的観いでし合の団互い的	も、基本的には社会的結合の歴史的均衡を考察する概念として有効なものであると考える。的結合の観点から分類した理由も此処にあるのであって、これは次に述べる如く更に分析されねばならぬに		以上の如く社会関係を論ずるに当って私は其の基礎に人間の同質性乃	2至類似性よりもむしろ人間の異質性
上基合に個前で均能てに一見の本の於体述結衡集相用方に加めていた。	上基合に個前で均能てに一の本の於体述結衡集相用方	上基合の本の	上基の本		マ支えているもの、即ち関係をして関
性上基合に個前で均能てに一見をの本の於体述結衡集相用方に置加的観いでし合の団互い的よ	性上基合に個前で均能てに一をの本の於体述結衡集相用方置加的観いでし合の団互い的	株山 た 基 合 を の 本の	が 性 上 基 を の 本	らしめているものに従って社会関係の二つの範疇を自発的結合と制度的	言結合に区別した。而してそれ等は相
し 深 以 福 認 的 方 的 後 点 点 点 合 ん 合 見 さ き 合 に 個 前 で 均 能 て に 一 見 て を の 本 の 於 体 述 結 衡 集 相 用 方 に い 置 加 的 観 い で し 合 の 団 互 い 的 よ	い か い い い い い い い い い い い い い い い い い い	い かい お お 合 か か か か か か か か か か か か か か か か か	いたる		日発性と合理的目的自発性に区別する
私見によれば結合とは関係する各個人が承認する限りに於いて成立する相互的行為の意味的装置であり、次立 私見によれば結合とは関係する各個人が承認する限りに於いて成立する相互的行為の意味的共優であり、次立 私見によれば結合とは関係の二つの範疇を自発的結合と制度的結合に区別した。而してそれ等は相互に を以て相互に結合しているかと云う側面に重点を置く。それは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合の たちで結合せしめられている社会関係或は集団の類型は結合のあり方や接触の仕方、即ち各成員が如何なる意志や目的 と、基本的には社会的結合の歴史的均衡である。これは云わば成員の心的動機に従った分類であって、結合の にだいて結合せしめられているかと云う側面に重点を置く。それは結合の動機にりも結合の現在的状態が中心とな の前合の観点からだは、それが如何なる均衡を以て一つの歴史的個性を形成しているか、それが現在如成なる ため結合の観点からだは、それが如何なる均衡を以て一つの歴史的個性を形成しているか、それが現在如成なる ため結合の観点からには、それが如何なる均衡を以て一つの歴史的個性を形成しているか、それが現在如成なる ためには社会的結合の歴史的均衡を考察する一次からすれば、社会体制が均衡のにまとまりのある完 も、基本的には社会的結合の歴史的均衡を考察する概念として有効なものである。人間結合を自発的結合と制度 のかく社会関係を論ずるに当って私は其の基礎に人間の同質性乃至類似性よりも結合の現在的状態が中心とな も、基本的には社会的結合の歴史的均衡を考察する概念として有効なものである。人間結合を自発的結合と間度 いたいて成立たが見俗であって社会関係の加険である。これは云のがしたが可なのか、それが現在如成なる 、本本的には社会的結合の歴史的均衡を考察する一般のとして有効なものである。人間結合を自発的結合と制度 のある完 のが代表的な見係である。これは云わば成員の心動機によりもおしろ人間の異質性乃至 も、基本的には社会的結合の歴史的均衡を考察する概念として有効なものである。人間結合を自発的結合と制度 のある完 ものがのが、それが現在の意味の均衡の観点から考察し、其の均衡の仕方、即ち各成員が如何なる意志や目的 となるのには社会の結合の歴史的均衡である。これは六日の意味の均衡の低しようとする事である。従来 としての都本的には社会の結合の意味的均衡の観点の意味に対してたらのがなるのによれては合とは関係の一本のである。のである。のに従って社会関係であるのである。これはためのがある。人間結合を自免して のが代表のがであるのであって、これは次に述べるのである。人間結合を自発の結合の規模である。 のが、本本的にはためためがである。これは次にしてもの動機にたった分類である。 の前台を相互いためである。 のがためるのである。 のが、たちろののたちろのであって、これは次に述べるのである。 人間の前台を自定しためのになるのである。 、本本的にはためるのである。 のであるのである。 のである。 のでもののであるのである。 のでもののであるのである。 のではためるのである。 のであるのである。 のでもののであるのである。 のではなるのである。 のであるのである。 のでもののがたちろのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のである。 のであるのでする。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるるのである。 のでする。 のでるのである。 のであるのである。 のでるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のである。 のであるのである。 のであるるのである。 のであるのである。 のでるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるるのである。 のであるのである。 のであるのである。 のであるのであるのである。 のであるのであるのであるのである。 のであるのであるのである。 のであるのである。 のでるのであるのである。 のであるのであるのであるのである。 のであるのであるのであるのであるのである。 のであるのであるのであるのであるのでなる。 のであるのであるのであるのである。 のであるのである。 のでるのであるのであるのでるのである。 のでるのでるのであるのである。 のであるのである。 のでるるのであるのである。 のでるのであるるの	をめ性上基合に個前で均能てに一基てをの本の於体述結衡集相用方	本を基礎付けているものである。 本性を置き、結合を相互の意味的以上の如く社会関係を制定の意味的には社会関係を論ずるに当いるものに従って社会関係を論ずるに当いのでいるものに従って社会関係の観点から分類した理由も此	~を基礎付けているものである。~を基礎付けているものに従って社会関係を論ずるに当いたの如く社会関係を論ずるに当な上の如く社会関係を論ずるに当らしたのからには社会的結合の歴史的		

(7)

哲学 爱愿人我之义间 女子 化合金合金 化合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金合金
が出来る。前者は例えば献身的宗教的価値感情の如く一方或は双方が自己の立場を行為そのもの価値意識から積
極的に放棄することによって相互の異質性を調整しようとする結合形式である。即ち例えば一般の客観的基準に
よれば対立や闘争関係に置かるべきものも此の形式に於いては最も親密な結合関係に転化し得るものであって、
此の場合制度関係は最小限に参与するにも拘らず、意識的にこれを無視する態度に出るのが普通である。合理的
目的自発性は一定の目的に対して双方からの自発的協力によって其の異質性を均衡化せしめている結合形式であ
って、例えば異ったイデオロギーを持つ人間或は政党が共通の危機に際会して結束する如き、或は異った経済関
心内容をもつ会社成員が共同の繁栄の為に協力する如きはこれである。此の場合は非合理的感情的自発性の価値
感情的媒介に対して、相手の地位理解を前提とし、目的達成の相互努力に関する同質感に支えられた均衡であり、
制度的関与はやや積極的となり、次に述べる制度的結合と不分明な場合もありうるが、これは決して冷たい関係
ではありえない。此の二つの形式は所謂ゲマインシャフト及びゲゼルシャフト関係、即ち結合自体の為の結合、
目的の為の結合という観点からすれば極めて相似の性質をもつ様にも考えられる。然しテンニースが此の二つの
類型に家族村落都市の生活大都市や国民的国家的生活を対応せしめた様に此の関係を考える事は出来ない。何故
ならばこれは次に述べる制度的結合の概念と共に以上の様な諸生活内容の状態を各歴史的秩序に於いて測定する
概念であるからである。
制度的結合には本来の一方的関係が慣習によって無意識的に結合する場合、或はその中に生れ込む場合と、制
度的強制によっえ義務的命令的に結合を余儀なくされる場合が区別される。実際に吾々の社会的現実には人間の
行為の自由が基礎され乍ら、主体的な二者選択が著しく拘束される制度的前提の存在を無視する事は出来ない。

· (8)·

五六五	自発的結合と制度的結合
これに従っている様な場合も考えられる。	が法的に禁止され、それが自己の生存を脅す様な強制力をもつときにこれに従っている様な場合も考えられる。
又強制的結合を同じ例で示すならば、離婚	様な顧慮から従来の儘の状態を余儀なくされている様な場合であり、
世間への体裁とか、慣習に反するとか云う	例としては、例えば不和の夫婦関係に於いて離婚の自由を持ち乍ら、
1一性として強固に示される。慣習的結合の	現われる。主観的な結合的均衡は不安定であるが、客観的な均衡は画
によって規定され、自発性は最も消極的に	制度的結合は権力或は制度を媒介とし、生存への関心が最も強く制度によっ
「生れ込む」場合をも包含すべきである。	れには上述の如き意識的なものと共に、一定の環境の中に無意識的に
こめる事によって結合の均衡を保持する。こ	式への同質感に支えられ、その中に各々の異質性を機械的に融合せしめる事によって結合の均衡を保持する。こ
但し勿論その選択は自由である。而して各個人の異質性は生活様	等を媒介とする伝統への関心の上に成立する。但し勿論その選択は自
I来る。慣習的結合は慣習や世間への気兼ね	前述の様に制度的結合は慣習的結合と強制的結合に区別する事が出来る。
るものなのである。	よる結合もそれが人間の危急存亡に関する限り、極めて強固となりうるもの
反って極めて短命な場合も充分に考え得る事であるし、強制に	結合も人間の自発性や緊張には限定がある限り、反って極めて短命な
強度に関する基準を定める事なしに措定する事は出来ないであろう。自発的	度的結合は弱いと云う様な公式を、強度に関する基準を定める事なし
此の意味では必ずしも一般に自発的結合は強く、制	の永続する限りはその結合を持続する可能性を有している。此の意味
のであって、制度的結合と雖も外的強制力	を多分に含んでいる。然し結合の強度と持続性は区別されねばならぬのであって、
る。この様な結合は確かに崩れ易い絶弱性	を調整するのであって、これによって結合の均衡が保持されるのである。
。から異った意味を与えつつ自己の反対 意志	である。此の場合は強制しようとする目的理念に各個人が異った立場から異
る事なしには結合関係を持続する事は困難	然し強制された結合もやはり其処には人間間の何等かの均衡が存在する事な

(9)

哲学 慶應義塾創 立百年記念論文集 五六六
人間生活の憩いの場として理想的にゲマインシャフト化されている家族生活も現実には以上の様な場合も尠から
ず指摘されうるであろう。家族関係に限らず凡ゆる他の関係に於いて「かくあるべき」先入感によって類型化す
ることは現実的状況を見誤るのである。家族、資本主義社会、村落共同体等は何れも歴史的概念としてのみ存在
するのであって、家族一般とか資本主義一般として存在するのではない。其の現実型的概念構成は如何なる社会
体制に於けるそれ等であるかが中心となるのである。
前述の如く自発的結合と制度的結合は相互に底礎し合う関係にある故に、慶々一定の関係が此の両範疇の何れ
に属するか不明瞭な場合も存在するであろうし、或は同程度にこれ等を含む場合も考えられる。此の判定には勿
論実態調査を通じての態度測定が行われねばならない。然し問題は自発的結合がその客観化過程に於いて次第に
慣習的結合に転化し、或は制度的結合がその内部に於いて自発的結合を生み出す様な状況に於いて最も著しく現
われる。その二つの要素が何れも無視されぬ様な場合、前者を制度的自発的結合、後者を自発的制度的結合とし
て指示するのが妥当であろう。此の両者は語義的に同じ様にみえ乍ら、そのニュアンスに於いては著しい相異が
みられる。凡そ一般に意味的世界に於いて質的意義の数量化は困難であり、亦無意義に近い場合が多いから、凡
ゆる自発的及び制度的結合に就いても夫々の具体的状況に応じた意味理解は不可欠なのであるが、上述の如き混
合形態にあっては特に各々の社会過程の推移の方向を示すものとして注意を要する。所謂冷たい関係と云われる
ものは目的的結合よりも制度的合に於いて現われ易いのであるが、社会関係を「冷たい」とか「温い」関係と云
う様な割り切り方ではなく、外面的な内部に現われる内面的な要因、内面的結合の中に成立する外面的な要因が
夫々のケースに於いて追求さるべきであり、これは現在の社会学に於いても重要な課題の一つに数えられている。

(10)

五六七	自発的結合と制度的結合
人的憎悪には無関係な人間同志が殺し合わねばならぬ様な状態は制度的対立関係と名付けて良いであろう。これ	人的憎悪には無関係な人間同志が
不本意乍ら対立するとか、或は戦争に於いて敵味方は全く見知らぬ、従って個	と使用人がストライキの場合には不本意乍ら対立するとか、
制度的関与が強く作用する故に個人的憎悪は滅退する傾向にある。例えば日常同じ職場にあって睦み合う上司	の制度的関与が強く作用する故に
礎し合っているのである。ただ闘争の集団的形態が強く現われる処では、対立	は少くとも最小限度には相互を底礎し合っているのである。
対立関係に於いても対立をして対立たらしめる動機は此の二つの側面から考えられ、それ等	が考えられた様に、対立関係に於
結合関係に於いて純個人的立場と外的制度的立場から結合をして結合せしめる動機	う事も指摘出来るであろう。結合
可能性を持つ故に、現代的対立関係は集団的形態に於いて著しく現われるとい	の文場からは正当性を保障される可能性を持つ故に、
亦諸個人の置かれている社会的地位に於いて同一事態も異った意味に解釈され、何れも其	種の価値観点があり、亦諸個人の
も否定出来ないが、社会学的に見るならば、特に諸価値の分立した社会では種	は純個人的感情的な側面のある事も否定出来ないが、
り、此の場合の均衡には自己放棄による調整の措置はとられない。対立関係に	しめようとする限りでの関係であり、
破れた場合、相手の反対意志を無視して一方的に自己の立場から相手を同化せ	様な均衡が目的や利害の相反から破れた場合、
は結合関係を自発的或は制度的調整による異質的意味の均衡として考えるが、対立関係(闘争を含む)とはこの	は結合関係を自発的或は制度的調
的、目的合理的秩序が闘争に於ける態度を方向付けると考えた。前述の如く私	性質のみならず伝統的、価値合理的、
して自己の意志を遂行しようとする意図に方向付けられている限りの社会関係であり、此の条件としては個人的	して自己の意志を遂行しようとす
更にこれに闘争関係を附加したとき、闘争とは或る行為が一人又は多数の抵抗を排	つつこれを結合関係となし、更に
はない。M・ウエバーがゲマインシャフト及びゲゼルシャフトの原理を援用し	なる分裂現象であって対立現象ではな
べて置こう。云う迄もなく人間の異質性、従って関係の一方性は其の儘では単	次に対立関係に就いて簡単に述べて置こう。

(11)

哲学 医應我 熟創 立百年記念論 文集	五六八
に対して個人感情による対立は自発的或は個人的対立関係と名付ける事が出来る	来る。制度的対立関係はやがて個人
的な対立に移行する可能性をもつと共に、又一方ではそれが個人感情に支えられ	られぬ空虚さの反省によって闘争の
の多くは此の様な動機に基づいてい	る。然し個人的感情的対立が比較的
解消し易い立場にあるのに対して、制度的対立は外的状況の存続する限り長期の持続性をもつものであって、	持続性をもつものであって、其
ては更に社会心理学的研究の援用を俟たね	ばならぬ処が多いのである。
	であるかに就いて一言して置こう。
私は単なるA(我)とB(汝)の関係を以て社会の成立とする平面的な図式を執らない。現実的なABの関係は	らない。現実的なABの関係は
既に諸制度を基礎とする共属の場を前提し凡ゆる人間関係は此の第三者的な場を共有する事によって可能ならし	共有する事によって可能ならし
められる。具体的に云えばABの取引関係は経済制度を前提し、契約関係は法政	法政的制度を前提する。然し此の基
体たる場そのものが現実の社会ではない。それはABの関係に支えられて始めて具体的な意味を実現する事が出	」具体的な意味を実現する事が出
如何なる支えられ方をされている	かが理解される事によって現実的立体
的な社会体制が示されるのである。如何なる支え方をしているかと云うことはい	は此の完結体としての社会体制が如
何なる意味で均衡を保持しているかの問題となる。例えば自由主義社会と云の時、	で、自由の概念のみでは此の社会
の実態を把握する事は出来ない。それは自由主義が成員によって如何に支えらど	て如何に支えられているかを問うに等しいであろ
う。処で此の支持の仕方は各成員が没我的にか、一定の目的の為に向って自発的	定の目的の為に向って自発的にか、慣習的にか、或は上から
強制的にされたものかに区別する事が出来る。これは制度的前提をもつ成員の凡ゆる関係の中に見出さるべきも	ルゆる関係の中に見出さるべきも
のであって、私が社会関係に就いて、従ってそれに基づく集団の分類として従来の基礎集団及び機能集団の分類	不の基礎集団及び機能集団の分類

(12)

自発的結合と制度的結合		にせざるを得なかった。のである。ただ説明に別の観点をとったことと、「概論」の行文と重複を避け	又に述べた要旨は私の「社会学概論」(礎付けたものである。 浸透され乍らも何等かの異質的な意味的均衡が行われているかという全体的社会体制の均衡の観点からこれを基をとらず、自発的及び制度的関係の分類を用いたのはそれ等の関係が制度的に浸透されされてゐるものか、或は
五. 六 九		を避けた為に形式を変え、多少叙述を簡略	and the second s	
		v		(13)

,